
1977札幌私立政外高等学校一夏一初夏編

加納 季里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1977札幌私立政外高等学校一夏一初夏編

【Nコード】

N7513Q

【作者名】

加納 季里

【あらすじ】

下校途中、定期券を買うため大通りの地下街を歩いていた所、久しぶりに会った女の子との約束にテンションが上がる、仲間達。く夏く初夏編です

私立高校でもい〜じゃね〜か（前書き）

夏編は、分けた方が良いと思い、あえて分けさせて頂きました。なので、今回はショートっぽくなっています。軽〜く御覧下さい。な

私立高校でもい〜じゃね〜か

6月になってから雨の日が増えた気がする。 今日も朝からパラついている。 野球部の

鹿田は喜んでいる。

この学校にはグラウンドというものが無いのだ。

他の学校のグラウンドを借りて部活動を行っているので運動部系でグラウンドを使うような部は、全て休みになる。なので、そういう状況を知らずに入部して、その後すぐ辞める生徒が後を絶たない。 当然、強くないし、真面目に部活動をする者は減ってくる。そうするとヤンキーやヤンキー崩れのたまり場みたくなって悪い事をする生徒も増えてくる。 たかが16歳の俺

でもその程度の事ぐらい解るのに、おかしいと思わない先生方の方がおかしいと思った。 思春期に有りがちな、社会に対する矛盾みたいな事を考えていると、矛盾を通り越した男、朝井がやって来た。

「カズヒロっ！帰んどっか寄ってくか〜?!」 すっかり俺の呼び方が、「みどろ」から「カズヒロ」になっていた。それだけ親しくなったという事か。

「今日、定期買わなきゃなんないから、大通りは行くぞ。」 「あ〜っ、鹿田と砂間

も定期買うつて言ってたから一緒に行くべ。」 「オ〜っ、わかった。」 学校の前には路面電車が走っている。 生徒の大半は電車を利用する。電車はそんなに時間を空けずに来るのだが、一車両ずつしか来ないので、乗車できる人数が限られてくる。 ましてや、専用車両でもないの、一般の人や他校の生徒も乗ってくる。 乗れるか乗れないか、ある意味、戦争に近いような感じだ。

校門を出ると、やはり結構並んでいる。最後列に、 俺、朝井、鹿田、砂間の順で並んだ。 電車は割りと早

く来た。 結構混んでいるようだ。 乗れるかな〜と心配していたが、ギリギリで乗れた。しかし、乗れたといっても乗降口、まとも

な体制を維持できない。押され続けてやっと終点の大通りに着いた。次々に人が降りる。まず俺が降り、朝井、鹿田

と降りた。あとは砂間だけなんだが、なかなか降りて来ない。

「確か砂間乗ったよなあ？」と尋ねると、みんな乗ったはずだと言うので、ちょっと待つことにし、5分程して次の電車が来た。

到着した電車の窓から中を見ると、砂間がいた。「なんでアイツ この電車に乗ってんだ？」みんな顔を合わせながら同じことを考えていた様だ。砂間が降りて来たので「お

前、一緒に乗ったよなあ？」と尋ねると「乗ったけど、みんなに押されて降りてしまって、乗ろうと思ったら扉が閉まったから待っててとも言えなくて。」すると朝井が「走ってこいやくつ。」と無茶な事を言いだした。砂間は、ムっとした表情になり「走っ

てこれるわけ ないっしょ!!」とムキになっていた。今度は鹿田が「お前の走る姿って、気持ち悪いよなあ。」と言ったもんだから、砂間がもっとムキになり「鹿田には言われたくないよ!!」と吐き捨てる様に言った。鹿田は短距離ならさほどではないが、極端な内股の為、長距離になると股ずれがおき、もの凄く遅かった。

大通りの地下街に行き、定期券売り場に行く途中で、背後から「バタバタバタっ!!」と幾つかの走る靴音がした。その靴音は俺達を通り越した所で止まった。「カク

ズちゃんっ!!」制服姿の女子が4人、こちらを見ながら、キヤッキヤッ言っている。「ええっ?」「わかんない

?あ・た・しっ!!」うゝん、考

えても思い当たらない。「ゴメンねっ、

ちよっと、わかんないんだけど、どっかで会った?」

イヤあゝっ!!、そういうこと言うのおゝ?!電話で何回も話してるのにいゝ!!」「ア

っ!!」と思った。札幌帝北商業高校に通う 森田 由美

だった。「ゆみいゝっ?!」「遅過ぎなく

い?」「イヤ、だって、お前と会うの中1以来だろうゝ

？そりゃあわからんって。」

由美とは中1の時、電話の「混線」という電話遊びみたいので知り合い、1度だけ会って話してるうちに、俺の小学校の時の親友と同じクラスで仲が良いということから、由美が電話をよくかけてくるようになった。俺の女の子関係には口やかましい母親が、由美からくる電話だけは嬉しそうに俺に繋いでくれる。今では、俺にかかってきてるのに自分が由美と話し込み、聞いていると娘と話している感じだ。

「あたし、そんなに変わったかなあ？」

「変わったなんてもんじゃねえっ！だろっ！！」

「カズちゃんは、やっぱりカッコよくなったよねえ、ウチの学校でもカズちゃんの中学の卒業アルバムで名前とか知ってる子、スッゴく多いよ。」

「卒業アルバムって、誰がまわしてんだっ？」と思ったが、目立つ時期ではあった。

テレビ

で、刑事ものののだが、田中 邦衛と草刈正雄が主演のドラマが人気があり、俺は草刈正雄にそっくりどころではないほど似ていたせいもあった。「ねえっ、来月、海行かない？」

砂間達を見ると、3人共、超高速で首を何度も縦に動かしていた。

「なんなんだコイツらはっ。」と呆れたが気を取り直し「コッチのカワイイ友達も一緒？」と尋ねると「エエっ！！」「ウッソおっっ！！」「ホントにいっっ！！」と、何

ともいえない高音を発している。「ウンっ、みんな都合よければねっ。」由美が笑顔でそう言った時、砂間と鹿田が股間を押さえたのを俺は見逃さなかった。どうせ、この子達の水着姿でも想像していたんだろう。「じゃあその時、電話してな。」「わかったあ、じゃあ来月ねっ！！」由美達と別れ、定期券を買った。

朝井が「カズヒロ、何人女の子いるのよ？」うらめしそうに聞いてきた。「友達だっちゅの！！」「ホントにか、絶対だろうな？」「絶対だっ！！」「この間の雪ちゃんと弘美ちゃんもスッゴいカワイかったけど、由美ちゃんも

スツゴいな〜!!!」 由美はロングヘアーで目の大きさが目立ち、
妙に色気があり、誰とでも仲良くなれ、男女問わず友達が多く、好
きなコトは好きと言えるハッキリとした性格で、本音で話せる俺の
大事な友達の1人だ。

「イヤあ〜っ、来月楽し
みだなあ〜っ!!!」 鹿田が上を見ながら指折り数えている。朝井は
「な〜に着て行くかなあ〜?」と早速ファッションの事を考え始め
た。髪の毛のゴミもなんとかしてほしいものだ。その横で砂間は、
まだ股間を押さえていた。

〜夏本番

編〜へ続く

私立高校でもい〜じゃね〜か（後書き）

〜夏〜本番編は、常識外れの仲間達が巻き起こす、これぞ青春というストーリーです。あと少々お待ち下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7513q/>

1977札幌私立政外高等学校－夏－初夏編

2011年2月8日12時40分発行